Route Press ルートプレス 21st.

道21世紀新聞
発行所：特定非営利活動法人 人と道研究会
東京都千代田区三番町 7-1　朝日三番町プラザ
Web　http://www.route-press21st.jp

語り継ぐ震災の教訓

岩手・陸前高田に高田松原津波復興祈念公園・国営追悼祈念施設が一部オープン

献花の場。海側から津波伝承館を臨む

岩手県陸前高田市に高田松原津波復興祈念公園・国営追悼祈念施設が2019年9月、一部オープンした。東日本大震災の教訓を伝える施設で、壊滅した道の駅「高田松原」も再興された。しかし、今年の政府主催の3・11追悼式典は新型コロナウイルスの感染拡大で、直前に中止された。式典は来年の丸10年を区切りに打ち切りが伝えられる。それだけに施設の中核、東日本大震災津波伝承館が果たす役割と存在意義は倍加する。旧道の駅「高田松原」（タピック45）は、震災伝承施設として「奇跡の一本松」とともに祈念公園の一角にたたずむ。自然災害を受容して郷土に暮らし続ける日本人。新型コロナも自然の産物である。自然とどう向き合うか。改めて日本人の心を見つめ、教訓を語り継ぐ大切さに思いをはせたい。

道の駅「高田松原」も復活

追悼・復興祈念公園のような施設の建設構想は、2012年に有識者委員会ができ、提言を受け閣議決定された。被害が大きい3県を対象に、岩手県は陸前高田市、宮城県は石巻市、福島県は浪江町に開設となった。その第1号として一部オープンしたのが、高田松原津波復興祈念公園である。

「祈りの軸」「海を臨む場」「献花の場」「奇跡の一本松」がオープン。津波が押し寄せた海へ一直線に伸びる「祈りの軸」など、伝承の大切さの精神に貫かれ、20年度中の完成を目指して工事が続いている。

日本は四季が織りなす世界でもまれな美しい国土を持つ半面、太平洋プレートなど四つのプレートがせめぎ合い、マグニチュード6以上の世界の地震の2割強がわが国周辺で発生する。台風の進路で風水害も絶えず、常に自然災害と向き合う宿命を負う。

「日本人は（地震・津波・原発事故）三重の大惨事を経験した。全ての命を守るため（教訓を）継承しなければならない」――昨年11月、38年ぶりに来日し広島、長崎と祈りの旅を続けたフランシスコ・ローマ教皇は帰京後、大震災の被災者と面会し、こう哀悼の意を表した。訪日の目的は「全ての命を守るために祈る」ことだった。

東日本大震災津波伝承館の愛称は「いわてTSUNAMIメモリアル」。震災の教訓を継承する「学びの場」だ。道の駅「高田松原」と一体の構造になっており、「命を守り、海と大地と共に生きる～二度と東日本大震災津波の悲しみをくり返さないために～」がテーマである。周辺の震災遺構とともに教訓を伝える拠点になる。

大震災と原発事故の後、物資不足や計画停電を経験し、経済優先の繁栄に慣れた生活から、少し我慢することや、真の豊かさは何かと、価値観を見直す機運もあったが、いつしかしぼんだ。

コロナ禍はどんな教訓を遺すか。人類が感染症を撲滅できたのは天然痘ただ一つ。自然に打ち勝つのでなく、それを封じ込め共存するしかない。社会を形作る人の営みは、自然と調和して生きること。日本人は手を取り合って英知を絞り、自然の驚異を乗り越えてきた。コロナ禍の今、未来の日本のあり方を考えなければならない。

INDEX

特別編集　語り継ぐ震災の教訓	
国営追悼祈念施設	**1～3面**
伝承への願い	4～5面
震災伝承施設	8～9面
自然災害と伝承碑	10～11面
英文ページ	16～12面

道の駅新聞「ルートプレス」は全国の「道の駅」で配布しております。

東日本大震災津波伝承館　特別編集号　おことわり　本号外は3.11に合わせて発行予定でしたが、コロナ禍により道の駅が休館するなどしたため、発行を大幅に延期しました。

「悲しみはくり返さない」

高田松原津波復興祈念公園の整備は、失われた全ての命の追悼・鎮魂／東日本大震災の被災の実情と教訓の伝承／地域に育まれた津波防災文化の継承／歴史的風土と自然環境の再生……などを基本方針に進められている。その心を伝えることは「東北の使命」でもある。大震災後丸9年がたった今年の3・11は、同祈念公園の一部オープン後、最初の3・11だったが、コロナ禍で政府主催の追悼式典は急きょ中止された。昨夏には産学官民の連携による一般財団法人「3・11伝承ロード推進機構」が発足した。震災の記憶の風化を防ぎ、全国の防災力を高める新たな動きの始まりである。

「奇跡の一本松」

伝承ロードも始動

朝日に染まる美しい広田湾。手前は津波伝承館と道の駅を併設した施設

かつて白砂青松を誇った名勝・高田松原は、わずかに「奇跡の一本松」だけを残して、7万本といわれた松が津波でなぎ倒され、流された。道の駅「高田松原」が入っていたしゃれた建築物「タピック45」も、鉄筋がむき出しになってよじれ曲がるほどの無残な姿になり、壊滅した。

犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓を後世に伝承する施設を核に整備が進むのが、高田松原津波復興祈念公園で、2020年度中の完成を目指している。

130ヘクタールの国営祈念公園

国営祈念公園の区域は約130ヘクタールと広大だ。松林を壊滅させ津波が押し寄せた広田湾沿いには、長さ2キロメートルに渡って高さ12・5メートルの長大な防潮堤が新たに築かれたが、祈念公園の敷地は防潮堤の背後にあり、海は見えなくなった。

構想を主導した建築家の内藤廣さんや同公園の基本構想検討会で委員長を務めた造園家の涌井史郎さんは、さまざまな遺族の思い、追悼と復興を象徴する場を作るには「海（自然）に対して思いをはせる」ことが「祈り」につながる重要な要素、との共通認識に立って整備を進めている。

震災遺構として整備中の「奇跡の一本松」。復興のシンボルとして人気を集めている

道の駅も一体で地域に賑わいを

海岸線に平行に建つ東日本大震災津波伝承館から、美しい広田湾の中央に真っ直ぐ向かう軸線は、防潮堤と直角に交差する。これを「祈りの軸」とした。旧道の駅があり震災遺構となったタピック45から伝承施設へと、防潮堤と平行する軸線が、被災、復興、未来の意味を重ね合わせた「復興の軸」である。

海へ向かう「祈りの軸」の先には式典を行う広場、その先に「献花の場」がある。川を渡る人道橋を経て、防潮堤の上に設けた10メートル四方のスペースが「海を臨む場」である。ここを「祈り」を理念とする祈念公園の象徴的な場、と位置付けている。

伝承館には装いを新たにした道の駅「高田松原」も一体構造としてオープン。商業施設として再出発し、少しずつかつての賑わいを取り戻しつつある。

東北の被災各地には貴重な教訓が数多く残るが、個々の取り組みだけでは大震災の実情や教訓の全体像を知ることは難しい。このため、効果的・効率的に震災を伝承するための連携を目的に18年7月、「震災伝承ネットワーク協議会」（国交省東北地方整備局、青森・岩手・宮城・福島各県、仙台市）が設置された。震災伝承の取り組みをネットワーク化して総体でメッセージを発信し、防災力強化と被災地の交流促進や地域創生を図る狙いである。

被災各地を巡り学ぶ仕組み作り

取り組みの柱は①震災伝承ネットワークの運営・伝承ロード形成②防災プログラムの基盤形成と開発③復興に向けた地方創生・地元支援だ。手始めに、大震災の実情や教訓を伝える「震災伝承施設」を募集。20年6月現在、236件が登録されている。震災伝承施設を表示する標章（ピクトグラム）や伝承ロードのロゴも作成し、案内標識やパンフレットなどに使っていく。

同協議会の取り組みは、東北4県にまたがる広域性、震災伝承の持続性、伝承ロード構築の新規性などのため、同協議会に産学官の有識者による「震災伝承検討会」を設置。検討会は、震災伝承施設を巡って学ぶためのホームページやパンフレットの作成、企業や地域、修学旅行向けの防災教育プログラムの提供、防災ツーリズムなど幅広く協議。昨春、幅広い取り組みとするため、産学官民が連携した推進体制の早急な整備を提言。「3・11伝承ロード」の構築を求めた。

学術団体や経済界を中心に取り組みを支援する一般財団法人「3・11震災伝承ロード推進機構」が8月に設立。同機構は「震災遺構を巡って教訓を学んでほしい」と、ツアーの企画をスタートしている。

作成された3・11伝承ロードの活動に使うロゴ

津波伝承館のテープカットをする、赤羽一嘉国交相（中央）や岩手県知事ら関係者

命を守る祈りと学びの場

中核を担う東日本大震災津波伝承館

地元建設業界の活躍ぶりなどのパネルに見入る来館者

シアターでは生々しい映像も上映

館内には、震災当時の現物も展示

事実を知る回廊には当時の写真など多数を展示

昨年9月、一部オープンした岩手県陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園・国営追悼祈念施設。その中核を担うのが東日本大震災津波伝承館である。伝承館は長さ約75メートル、幅約30メートル。海側に向かって右に震災被害から復興した道の駅「高田松原」、左に伝承館が一体の建物になっており、BRT（バスを基盤とした大量輸送システム）の駅も併設した大規模施設である。

災害リスクに備えるには、災害の教訓を踏まえ、行政・住民・企業など全ての主体が災害に関する知識と心構えを共有することが大切になる。

伝承館は「大災害であっても、人間の知恵・技術・行動によって、命を守り、乗り越えることができる」を震災伝承のコンセプトに、東日本大震災による被害と悲惨さを伝えるだけではなく、証言や事実に基づく教訓を伝承する施設として建設した。

先人の英知に学ぶ

東日本大震災津波伝承館は愛称「いわてTSUNAMIメモリアル」。伝承館はミッション・ステートメントとして「先人の英知に学び、東日本大震災津波の事実と教訓を世界中の人々と共有し、自然災害に強い社会を一緒に実現することを目指します」とうたっている。

1000平方メートルを超えるスペースは、教訓をネットワークで伝え学ぶ場所として地域と交流するゾーン0（ゼロ）に始まり、災害の歴史、地球規模のメカニズムを知る「歴史をひもとく」ゾーン1／災害の実相を本物から学ぶ「事実を知る」ゾーン2／岩手県を中心にした事実と命を守る教訓を知る「教訓を学ぶ」ゾーン3／「復興を共に進める」ゾーン4――の四つのゾーンで構成される。

被災して無残な姿になった車など実物の展示や、津波の実写映像の上映をはじめ、数多くのパネル展示で、当時の姿を今に伝える。

「教訓を学ぶ」ゾーン3には、震災初動以降の司令室となった国交省東北地方整備局の災害対策室を移築している。ここでは災害復旧のための「くしの歯作戦」をはじめとする、インフラ関係者の初動対応が追体験できる。

津波警報が発令される中で、現場の最前線で道路啓開を担った建設業関係者の活動も、作業員の生の声とともに展示されている。当時の緊迫した雰囲気、さまざまな関係者の苦悩、決断と行動が現実感をもって伝わってくる。

自然災害の多発、激甚化が問題になっている今、時代は「防災意識社会」への転換を求めている。この伝承館は、災害列島日本を見つめ直す拠点となる。

伝承館内のスタッフは、多言語でお迎えをする

発生当時の災害対策室を移築。往時の指揮官らがメッセージを寄せる

高田松原津波復興祈念公園や伝承館の整備に関わった人たちの願い

高田松原津波復興祈念公園・国営追悼祈念施設や東日本大震災津波伝承館の整備、建設に関わった人たち、震災当時に復旧・復興の最前線で奮闘した現場関係者らに、当時を振り返り、祈念施設や津波伝承館のオープンへの思い、伝承の大切さなどを語ってもらった。

未来の人たちへのメッセージ

建築家（設計）　内藤廣氏

海を見たくない、思い出したくない、震災遺構など見たくない、という方もまだたくさんいらっしゃいます。一方で、あの記憶と教訓がどんどん薄れていく、という危機感を持つ方たちもいます。ある委員会で地元の若い委員から、次の次の世代に言葉だけで伝えていくのは難しい、という発言がありました。こうしたご意見を踏まえながら震災遺構の保存が検討され、これを含む追悼祈念公園が整備されました。

この公園は「二つの包摂線」と「二つの軸線」という構成をとっています。防潮堤の背後を柔らかく大きく包むランドスケープと、国営祈念公園のまとまりを形成する小さく包むランドスケープ、これらが二つの包摂線です。これとは対照的に、遺構であるタピック45、伝承施設、さらに新しい道の駅に至る「復興の軸」、それと直行して海に向かう「祈りの軸」、これらが二つの軸線です。

伝承施設と新しい道の駅を含む建物は全長160㍍で、復興の軸の上にゲートのように配置されており、正面の壁には追悼の意を表すため、亡くなられた方たちの数である1万8745個の穴が開けられています。海に向かう祈りの軸の線上には、手前に「鏡のような水盤」、緩やかに降りていったところに「献花の場」、さらに防潮堤の上に「海を望む場」が設けられています。

大きなエリアなので、国・県・市などのさまざまな制度境界があります。それらを越えてまとまりのある風景が出来上がったとすれば、この計画に加わった人たちの追悼への思いが一つになったからです。たくさんの人が訪れ、訪れる方たちの気持ちに寄り添い、遠く未来の人たちにもわれわれの時代のメッセージを伝える場となることを願っています。この施設の設計に携われたことをとても誇りに思っています。

津波伝承館と道の駅が併設された施設から、津波が押し寄せた海に向かって「祈りの軸」が一直線に伸びる

伝えたい「克災」の心

東京都市大学特別教授（造園家）　涌井史郎氏

大震災の犠牲者への哀悼とともに地域の立ち上がりに対して何を助力できるのか考えた時、悲劇を後世に語り継ぎ、なぜそうなったのかを反省し、自省する大切さを痛感しました。東北は人口減少や高齢化で地域経済力が縮退していますが、震災が東北をさらに追い込んではなりません。

日本は世界でもまれな美しい国土である半面、自然災害を常に受け止めなければいけない宿命を負っています。災害を含めた自然のダイナミックな動きが日本の美しさを形成してきたとも言え、世界の中でも自然災害との向き合い方、付き合い方で、日本はある種のモデルに成り得ると思うのです。

陸前高田市のNPOの方の「自分たちは故郷として育まれた地域のことをどれほど学んできたのかが一番悔やまれた」という言葉が胸に刺さりました。自然を学んでいなかっただけでなく、祖父母が唱えてきた伝承に耳を傾けず、自分の行動に置き換えることのない時を過ごしてきた、という反省と自己評価でした。繰り返してはいけないこと、尊い命を犠牲にしてはいけないという教訓を、後世に伝承することは我々の義務だと思うのです。

国民はこの悲劇を共有すべきで、そのために地域を訪れてほしい。それには来訪者を迎えるにふさわしい施設であってほしいという観点から復興祈念公園を考えました。高田松原では東日本大震災津波伝承館に、再興した道の駅も併設。大勢が足を運んでくださり、復興祈念公園を提案した一人として感慨深いものがあります。

東北では悲劇を乗り越え、地域を愛し、その土地に暮らし続けてきました。防災や減災を超えた「克災」の心を感じます。災害を克服し地域の復興を進める強い心。尊い命を守るには過去の災害に学び、共有するために伝えること。それこそが「伝承」に他なりません。

震災伝承施設ピクトグラム

街に、ルネッサンス　UR都市機構

1日も早い、復興のために。～UR都市機構の復興支援～

UR都市機構は60年以上にわたるまちづくりの経験を生かし、東日本大震災の発災直後から被災地の復旧・復興支援に取り組んできました。発災から9年、今も復興に向けて歩みを進める被災地を、まちづくりの面から全力で支援しています。

URが建設する災害公営住宅の戸数

（令和2年３月現在）

住まいを失われた方、避難を余儀なくされている方のための公営住宅を建設しています。

5,932戸

（うち5,833戸は完成・引き渡し済み）

福島県いわき市 県営勿来酒井団地

岩手県と宮城県の仙台市を除く市町村整備分については 約4割 を建設

岩手・宮城県市町村（仙台市除く）約13,400戸※　UR 5,024戸

URが整備する復興市街地の総面積

（令和2年３月現在）

これまで培った経験やノウハウを生かし災害に強い安全な市街地や復興の拠点を整備しています。

1,443ha

女川駅前レンガみち周辺地区 提供：女川町

津波被災地域の土地区画整理事業については、計画面積の 約6割 をURが支援※

市町村 約762ha　UR 約1,123ha

福島県の原子力災害被災地域における復興まちづくり支援

東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故により、避難指示が続く大熊町・双葉町・浪江町において、避難者の方々が帰町できる環境を実現するため、ハードとソフトの両面から復興まちづくりを進めています。

避難先の会津若松市から8年ぶりに町内へ戻ってきた大熊町役場新庁舎（大川原地区）

3月14日に再開した JR常磐線双葉駅前

※令和元年11月15日復興庁公表「住まいの復興工程表」（令和元年9月末現在）、各県HP及びUR調べをもとに作成

震災当時に復旧・復興の最前線で奮闘した現場関係者らの思い

鎮魂・慰霊と教訓・伝承こそ

政策研究大学院大学客員教授
徳山日出男氏（東日本大震災当時東北地方整備局長）

津波伝承館オープンで施設を見学した時、「教訓を学ぶ」ゾーンに国交省東北地方整備局の災害対策室が復元されているのを見て、感慨を覚えました。東日本大震災は整備局長着任2カ月足らずの時でした。

経験のない激震。まず落ち着かなければと思いましたね。何より「人命救助」です。それには何が必要か。飛んだヘリの映像も中継アンテナの被災で不鮮明でしたが、沿岸部が壊滅したことは想像できます。人命救助と救援部隊、医療チームを被災地に送るには車両が通れるルートの確保が必須。

内陸の国道4号から沿岸地域を東西に結ぶ道路を開く「啓開」が緊急課題でした。「くしの歯作戦」と名付け不眠不休の作業を開始。きれいな道である必要はなく、車が通れればよいのです。

どんな障害も強行突破。災害時の出動協定を結ぶ地元建設業者の重機と一緒に突き進みました。がれきを処理し、段差を直し、救命・救援ルートを切り開いた「くしの歯作戦」。16ルートのうち、11本をわずか2日間で確保できた時は、現場の努力に感動しました。

津波伝承館を見てしみじみ思いました。備えることで救える命、学ぶことで助かる命があることを知ってほしいと。「教訓が命を救う」のです。それを伝えることが、東北に与えられたミッションだと考えます。

近年、地震以外にも火山噴火や台風、豪雨による洪水など自然災害が頻発しています。一定規模の災害は防げるようになった半面、災害への意識が薄れ、いきなり巨大災害に直面することが増えました。「低頻度大災害の時代」になったと感じています。災害の都度「まさか来るとは思わなかった」などの言葉が繰り返されますが、過去の災害の知識があれば命を失わずに済んだケースは多く、教訓や備え、組織の重要さがうまく伝わっていないのです。

日本は世界有数の災害リスクの高い国ですが、その宿命を先人の知恵と努力で克服してきました。それだけに防災の知識や経験を世界に伝える必要があるのです。語り伝えるべきは「鎮魂・慰霊」と「教訓・伝承」です。災害の悲惨さや犠牲者を忘れてはいけませんが、命を守る教訓、命がけで戦った記録、助け合い、有効だった備えなどを語り継ぐことは、災害を乗り越える英知を伝えることになります。「防災意識社会」の実現が重要です。東北で始まった「3・11伝承ロード」の取り組みに期待しています。

宮古市、釜石市での奮闘 展示から

以下の岩手県宮古市と同県釜石市の地元建設業界の奮闘例は、津波伝承館の展示パネルの抜粋（要約）である。

宮古市

宮古大橋の上から見た光景は、津波に押し流された大量の家々や多くの車が積み重なり、土砂で真っ黒に埋もれた道路を船がふさいでいた。ここを開かなければ地域災害拠点病院の岩手県立宮古病院への道はない。津波当日3・11の夜、う回路を駆使して維持管理区内を回り、田老地区の状況を確認していた国道維持管理業者は、この道を開く重要性を誰よりも認識していた。

しかし、12日昼でも、いまだに数10㌢の津波が川を遡上し続けていた。国交省東北地方整備局の職員は「最低限でも交通を確保したい」と言った。維持管理業者は「私からは作業しろとは言えない。何があっても責任が取れない」。「それは俺も同じだが、一緒にやってくれないか」と職員。「作業員たちと話してみます」と業者。

「ここを通して宮古病院や田老地区に国道をつなげたい。道がなければ病院にも行けない」と業者。「どうしても誰かがやらなければならないことなんだ」と作業員。そして、バックホウ（パワーショベル）のエンジンをかけ、土砂で真っ黒になった国道に降りた。

緊張で胸が押しつぶされそうだった。「がれきの中に生きている人がいたら……」。いまだ大津波警報が発令される中、被災地への命の道を開いたのは地元建設業の人々だった。自らも被災者。家族の安否も知れず、繰り返される地震と津波の恐れのある中、「自分のまちは自分で守る」一心で行動した。

くしの歯作戦、決行。バックホウでがれきを除きながら道路を啓開

釜石市

釜石市鵜住居（うのすまい）地区では、地元の建設業者らが自主的に作業に取り組んでいた。3・11当夜から地域の建設業者らに声をかけ機材を集め作業に備えた。「朝から出よう」。みんなで決めた。12日早朝、集まった作業員らの眼の前には、津波で家屋が押し寄せた道に電柱が倒れて電線が絡まり、その横でプロパンガスのボンベがシューシュー音をたてていた。しかし、今ここで作業をできるのは地元の有志だけなのだ。

緊急車両が列を連ねていたが、車両は通行できない。先へは徒歩で向かうしかない。県道をあけ、通行できる三陸自動車道へ上がらねば。作業は午後も続いたが、がれきの量はあまりにも多い。「それならここに坂を造るぞ」。三陸自動車道へと6〜7㍍下の県道から土を盛り、坂道を造る。

次々と人が加わった。重機が3台、4台と集まった。夜を徹して作業は続いた。「国道も県道もない。市街地へ、大槌町へと向かう道をひらくんだ」。13日朝、坂道は完成。滞っていた交通が一気に動き始めた。作業ができるのは、現実的に建設業者だけ。「俺たちしかいない」という気持ちがみんなにあった。

震災を風化させたくない プロ野球選手として発信

ロッテの佐々木投手

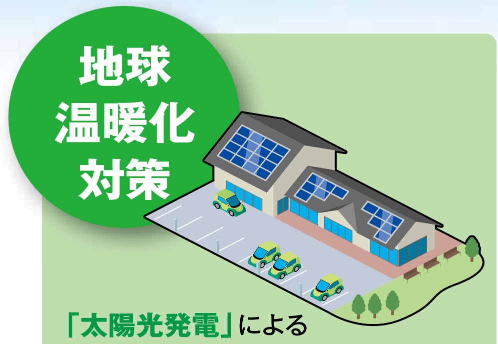
大リーグ・エンジェルスの大谷翔平選手以来とも以上ともいわれるプロ野球界期待のルーキー、ロッテの佐々木朗希投手は、岩手県陸前高田市の出身である。同市立高田小3年の時、大震災を経験、野球の手ほどきをしてくれた父と祖父母を津波に奪われた。その後、母方の実家がある大船渡市に転居。野球名門校へは進まず、苦労した仲間と野球がしたいと、県立大船渡高校に進学した。惜しくも甲子園行きは逃したが、ドラフトではプロ4球団の1位指名が競合する逸材に成長した。

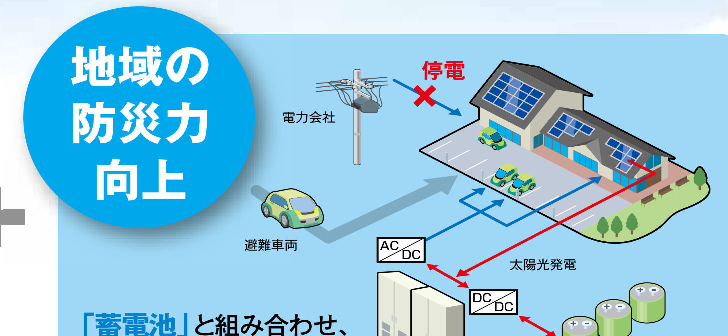
佐々木投手は今春、キャンプ地で3・11を迎えた。「亡くなった人たちの分も一生懸命に生きなければならない。震災を風化させたくない。これからはプロ野球選手として、発信し続けていきたい」と話した。

いつもを支えもしもに備える。

MEIDEN Sustainable Power Supply System

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS　MEIDEN Quality connecting the next





株式会社　明電舎　本社　〒141-6029 東京都品川区大崎 2-1-1 ThinkPark Tower　電力・エネルギー事業部 再生可能エネルギー部　Tel.（03）6420-8271

「高田松原」再生オープン

震災から復興 重点道の駅

重点道の駅「高田松原」が、3・11から8年6カ月たった昨年9月22日、再生オープンした。岩手県陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園・国営追悼祈念施設の東日本大震災津波伝承館と一体となった新たな施設として、重点道の駅「高田松原」が震災被害から復興したのだ。

重点道の駅は、地域活性化の拠点となる計画があり、今後の効果的な取り組みが期待でき、その取り組みを広く周知して関係機関が連携し、重点支援する制度である。

「高田松原」は、復興のメドさえ判然としない、大震災から3年後の2014（平成26）年度に、震災の記憶を伝え、地域の総合観光のゲートウェイとしての将来を展望して、第1回目の重点「道の駅」（35カ所）の一つとして選定されていた。

「タピック45」としておしゃれな建物だった旧道の駅「高田松原」は、震災の大津波によって鉄筋がむき出しになってよじれ曲がるほど、無残な姿になり壊滅した。屋上近くまで津波が襲いかかり、屋根に避難した3人が辛うじて助かった。その遺構である道の駅が、震災伝承・復興の核として再生したのだ。

地元の生鮮食品レストランも

新しい道の駅には、地元の漁協などが協力して生鮮食品や特産品を販売するコーナーをはじめ、レストランやカフェもあり、開業から約1カ月で10万人が訪れる盛況ぶり。1日当たりの平均来館者は3000人以上と、被災した沿岸地域のにぎわいを取り戻す核として、期待通りの活力を発揮している。

震災の実態と教訓を国内外に向けて発信する津波防災文化、津波防災教育の新たな拠点として、三陸沿岸地域のゲートウェイの役割を十分に担える実績を積み重ねている。地元の人たちはもちろん、インバウンドを含む道の駅利用者にとって、魅力的な道の駅に生まれ変わった。

旧道の駅「高田松原」（タピック45）は、被災時の姿をそのまま今に伝える震災伝承施設として、元の位置に保存されている。

すなば珈琲。鳥取県知事からもお祝いが

てっぺん近くまで津波が襲った旧道の駅「高田松原」。屋根に逃れた3人は柱などにつかまり、助かった

震災伝承施設として遺された、被災当時の旧道の駅「高田松原」

広田湾漁協のまつばら食堂

広田湾漁協の店舗。ご当地の牡蠣は絶品

利用客でにぎわうレストランコーナー

人も集まり、にぎわい始めた店内

災害対策用トイレ・ラップポン　凝固剤を入れてボタンを押せば自動でラッピング

日本は近年、地球温暖化の影響もあり局地的な豪雨災害や大地震が多発している。電気、ガス、水道など生活に欠かせないインフラや住居が打撃を受けると、被災者の暮らしは困難を極める。直面する問題は何よりトイレだ。水が流せず、ノロウイルスなど感染症の恐れがある。トイレを我慢しエコノミー症候群に、など避難所でも深刻だ。

仮設トイレを待ち望む被災者の悩みを解決しようと、災害対策備蓄用の自動ラップ式トイレ「ラップポン」の導入を進めているのが販売代理店の株式会社オアシスMSCだ。

ラップポンは凝固剤を入れてボタンを押せば自動でラッピング。特殊防臭フィルムで1カ月以上、菌も臭いも漏れず、軽量で備蓄の場所も取らない。製造元は日本セイフティー株式会社ラップポン事業部で、災害備蓄用に民間企業、官公庁、自治体などに1万台以上導入実績があり、オアシスMSCは災害拠点として期待される道の駅でも導入を、と呼び掛けている＝**別表参照**。

ラップポン被災地支援設置状況		
能登半島地震	11カ所	50台
中越沖地震	30カ所	100台
東日本大震災	50カ所以上	500台
熊本地震	95カ所以上	約450台
西日本豪雨	130カ所以上	約500台
北海道地震	20カ所以上	100台

一般的なトイレが使えなくてもラップポンなら大丈夫（右）

株式会社オアシスMSC
OASIS MEDICAL SUPPORT CENTER
〒144-0052 東京都大田区蒲田5-38-3 蒲田朝日ビルディング8F
株式会社オアシスMSC　メディカルサポート事業部
TEL：03-5711-8211/ FAX：03-5711-8219
http://www.oasismsc.co.jp/index.html

道の駅も被災した東日本大震災からの復旧、復興。全国で支援の輪が広がった。壊滅した岩手県宮古市の道の駅「宮古」や陸前高田市「高田松原」、全壊から必死の努力で営業再開した宮城県気仙沼市「大谷海岸」や福島県いわき市「よつくら港」。復興の鍵は「道の駅の連携」だった。道の駅の奮闘を振り返る。＝**出来事、固有名詞はいずれも当時**

道の駅「上品の郷」の休憩コーナーには寄せ書きの大横断幕

全国的な支援の輪　復興の鍵は「道の駅」の連携だった

「大谷海岸」救った「農・海・林ロード6」

道の駅「大谷海岸」。JR気仙沼線大谷海岸駅に接し、新鮮素材レストラン、マンボウ飼育などで人気だった。津波は3階に達し建物は全壊。地域の暮らしの支えだったため「何とか再開を」と支援に立ち上がったのが「農・海・林ロード6」である。

近隣の道の駅同士で交流を深めようと、農業・海岸・林業の各地帯2カ所計6駅（大谷海岸、津山、林林館、上品の郷、米山、みなみかた）が震災数年前、自発的に連絡会を作っていた。日頃はライバルだが、イベントなどを共同で実施し、互いにレベルアップしようという目的だった。

スタンプラリー、物品を持ち寄る市、割引や抽選の共同企画、自慢の「道の駅弁当」の共販、ロードマップやパンフの共同制作……。地域おこしに注力してきた。そこに大震災が襲った。

仲間の大谷海岸が壊滅。住民に食糧入手の道をと、当座の資金を出し合い営業再開へ共同支援。道の駅は壊滅したが横の小屋は鉄骨の柱だけ残った。「周りをボードで囲えば営業は可能」と「津山」の西條孝一駅長が率先協力。本業の製材所から板を運び、床や陳列棚を手作りした。仲間の他の駅も机など備品や機材を供出し、卵や野菜など商品を供給。「大谷海岸」の再開は住民に大きな福音となった。

西條駅長は小学5年の時、チリ津波を経験。大震災では「津山」は山間部で被害を免れ、震災直後は南三陸町などからの避難者を大勢受け入れた。同駅長は「大谷海岸の再開が何よりうれしい」と話す。「農・海・林ロード6」はその後も、共同復興市を開いて被災者に物品を提供、義援金も集め、復興に力を発揮した。

ロード6の仲間の支援でよみがえった仮設「大谷海岸」の陳列棚

「たろう」へ各地の道の駅から特産品届く

高さ10㍍の大防潮堤を乗り越えた大津波で壊滅的被害を受けた岩手県宮古市田老地区。高台の道の駅「たろう」自体は被害を免れたものの従業員の多くが家を失い、停電や断水で一時閉店したが、道の駅の連携で営業を再開、地域拠点の役割を果たした。

道の駅の防災拠点化を進める国土交通省が、隣接地に非常用発電、給水、暖房装置付き「たろう津波防災・道路情報館」を整備し、市の災害時一時避難所に指定されていたため震災直後、旅行者や地域の人が大勢集まってきた。

駅長兼事務局長の門屋悟さんも自宅を流されたが、地域復興に「たろう」は不可欠との信念で、従業員と在庫の飲食物を配布するなど避難者の世話に没頭した。各地の道の駅と進めた特産品交流で、交流・連携相手の道の駅や利用者からの激励メールが相次ぎ10日後、営業を一部再開できた。

岐阜県の道の駅「土岐美濃焼街道」の駅長は、地元や途中の道の駅を回って集めた特産品、支援品を車いっぱいに積み、どうにか復旧した道路をひた走って、自ら届けてくれた。

他の交流先、青森県つがる市の道の駅「もりた」／新潟県長岡市「越後川口」／石川県能登町「桜峠」／岐阜県中津川市「きらら坂下」「加子母」／静岡県富士市「富士川楽座」／愛知県田原市「田原めっくんはうす」／愛媛県今治市「今治湯浦温泉」などからも次々に特産品が届いた。門屋さんは「産品の交流だけでなく人の交流をしていたのだと分かった。大切なのはお金やモノ以上に人の力だ」と話していた。

「よつくら港」ボランティアがかれき撤去

道の駅「よつくら港」。漁港に隣接し取れたて海産物料理で人気だったが、柱と屋根を残して壊滅した。

東京の子ども漁業体験受け入れや10年以上続く交流事業先からの安否確認やお見舞い、激励電話やメール……。ボランティアも駆け付け、自宅を失い避難所生活の副駅長白土健二さんらスタッフも、支援者の好意に動かされて営業再開へ奮起。まちおこしで交流する近くの三島町からは町ぐるみの支援でボランティア80人が重機とともに訪れ、がれきで埋まった店内を一気に片付けてくれた。

「ひらた」「ふるとの」「たまかわ」や会津地区9駅など近隣道の駅から特産品が持ち込まれ、復興支援セールを開催、仮設店舗で営業を再開できた。

魚を販売し地域交流でまちおこしに取り組む「四倉ふれあい市民会議」副会長の若松光さんは「沢山の支援に人のご縁のありがたさを痛感した」と語る。

東北「道の駅」連絡会が「災害支援委員会」結成

東北「道の駅」連絡会は「災害支援委員会」を結成、各駅で自主的に募金活動を実施し被災した道の駅に支援一時金100万円ずつを届けた。

東北「道の駅」復興支援の「スタンプラリー2011」も実施。チャレンジブックの売り上げから100円を支援金に充て、参加者に抽選で東北「道の駅」の特産品共通引換券を贈るなど、道の駅同士の連携で復興を支援した。

～道の駅に「いつでも・どこでも・すぐ」買える紙おむつ自動販売機の設置を開始～

2018年9月に国土交通省から、「高速道路のSA」や「道の駅」の子育て応援施設の整備を加速することが発表されたのを受けて、セコム医療システム株式会社、ダイドードリンコ株式会社、大王製紙株式会社の3社は「子育てをされている世代が紙おむつの心配をすることなく外出できるようにしたい」と考え、ベビー用紙おむつ小パック（2枚入り）を購入できる飲料とコラボした自動販売機を企画、設置を実現しました。この紙おむつ自販機は、2019年月、1号機を道の駅「いたこ」（茨城県）に設置。その後、道の駅「北川はゆま」（宮崎県）、道の駅「みまの里」（徳島県）、道の駅「加治川」（新潟県）と道の駅「庭園の郷保内」（新潟県）に設置しています。

全国道の駅女性駅長会の会長で道の駅「庭園の郷　保内」の加藤はと子駅長は、紙おむつ自販機設置について「道の駅では、お子様連れのお客様は増えています。三世代であったり、お父さんと一緒、おじいちゃんと一緒など形態もさまざま。授乳室や哺乳瓶用のお湯の提供と合わせて紙おむつ販売の需要も増えていると感じています。お客様が気軽に立ち寄れ、お子様連れでの休憩の場所として道の駅を使っていただける大きなツールになると思います。紙おむつを購入できる自販機はサービス向上に大変役立つと期待しています」と道の駅で数多く設置されることを期待。

今後も3社は地域社会全体で乳幼児親子が外出しやすい環境づくりを進める一翼を担い、日本の少子化の歯止めに少しでも役立つよう社会に貢献していきます。

道の駅「庭園の郷　保内」（新潟県三条市）に設置

【お問合せ先】
SECOM　セコム医療システム株式会社　TEL：03-5775-8030
DyDo　ダイドードリンコ株式会社　TEL：06-6222-2624
elleair エリエール　大王製紙株式会社　TEL：03-6856-7583

3・11伝承ロード　未来へ伝えるべき教訓で結ばれた伝承の道

東日本大震災は、太平洋沿岸500キロメートルもの広範囲に渡り津波による甚大な被害が発生、多くの尊い命や貴重な財産が奪われた。助かった命もあるが、被災地には被害の実相や具体的な行動に基づいた「伝えるべき教訓」が遺る。被災した東北各地に多く存在する教訓を、遺構とともに震災伝承施設として遺し、ネットワーク化して全国に伝えようというのが「3・11伝承ロード」の取り組みだ。未来へ伝えるべき教訓で結ばれた伝承の道が教えるのは「教訓が、いのちを救う」である。代表的な震災伝承施設をいくつか紹介する。

八戸市みなと体験学習館　青森県八戸市

八戸市みなと体験学習館は、新井田川河口の高台にある館鼻公園内に、湊地域の歴史や文化、東日本大震災の実情と教訓を伝える学習の場として、令和元年にオープンした。当時の状況を映像と音で表現した「震災タイムトンネル」や、地震発生から復旧・復興までの歩みを伝えるグラフィック年表、情報端末で視聴する津波アーカイブで、津波の脅威や災害に備える大切さを人々に伝えている。

八戸市みなと体験学習館

館鼻公園から臨む八戸港

田老防潮堤　岩手県宮古市

高さ10メートル長さ2・4キロの長大な防潮堤は「万里の長城」と呼ばれ、2階建て住宅より高く堅牢だった。田老地区は明治29年の明治三陸大津波と昭和8年の昭和三陸大津波で壊滅的な被害を受け、昭和9年から3次にわたる防潮堤建設に着手。万全に見えたが、津波の高さは防潮堤を凌ぎ、同地区に再び甚大な被害をもたらした。流失を免れた防潮堤を残し、脅威と教訓を防災の取り組みに活用していく。

震災直後の田老の防潮堤 出典：〈いわて震災津波アーカイブ 提供者：（一社）宮古観光文化交流協会〉

写真提供：宮古市

奇跡の一本松　岩手県陸前高田市

陸中海岸国立公園（三陸復興国立公園）に指定され、渚百選に選ばれた「名勝高田松原」は、江戸時代に防風・防砂林として植林されたのが始まり。7万本もの松林は白砂青松の観光地として賑わった。大津波で失われた高田松原で唯一残った松が「奇跡の一本松」として復興のシンボルになった。海水のダメージで枯死が確認されたが、震災の記憶を後世に受け継ぐモニュメントとして保存された。

震災前の高田松原
提供：（一社）東北地域づくり協会

津波遺構たろう観光ホテル　岩手県宮古市

たろう観光ホテルは1986（昭和61）年の建設。津波備のため2014（平成26）年に宮古市が取得、被災した6階まで浸水、2階までは「ありのままの姿を残すこと」で4階まで浸水、2階までは柱を残して流失したが、倒壊が目的である。訪れる人々に津波の恐ろしさを伝え、人々の防災意識を高めることで、震災による被害が繰り返されないよう、現在の姿のまま保存する。

写真提供：宮古市

震災前のたろう観光ホテル
写真提供：（株）文化印刷

震災遺構明戸海岸防潮堤　岩手県下閉伊郡田野畑村

明戸海岸を襲った津波。直前には水際が海岸線より数百メートル沖まで引き、海底が露わになった。津波は簡単に防潮堤を乗り越え一帯を呑み込んだ後、引き波となって防潮堤を破壊した。津波痕跡調査で、津波高は17・1メートルと推測される。被災した明戸防潮堤は津波の計り知れないエネルギーと人工物の破壊状況が見て取れる貴重な遺産。住民や観光客等の防災意識の高揚に役立てられている。

写真提供：田野畑村

震災前の明戸海岸防潮堤（明戸水門）
写真提供：田野畑村

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館　気仙沼向洋高校旧校舎　宮城県気仙沼市

写真提供：気仙沼の公式観光サイト「気仙沼さ来てけらいん」

震災後の向洋高校旧校舎
写真提供：（一社）協働プラットフォーム

旧校舎は海岸から約550メートル離れていたが、校舎の最上階4階まで津波で浸水した。校内にいた多くの生徒は避難して無事だったが、建物の損傷は激しく、流れてきた鉄筋造の冷凍倉庫によって損傷した4階の壁や、校舎内に流れ込んだ車、ガレキなどは被災時のまま。校舎間の渡り廊下には、ガレキとともに折り重なる車も見ることができる。隣接して津波の脅威を伝える伝承館が建設された。

いわき市ライブいわきミュウじあむ　福島県いわき市

いわき市内の震災当時の状況や復旧・復興に向けた歩みを、展示パネルや記録映像などで振り返り、同市の食や観光など、現在の姿を発信することを通じて、被災地を応援する取り組みを進めている。家族や知人に見てきた現状や聞いたことを伝える機会を提供するとともに、多発する大規模災害への防災意識を再確認する場としての役割を担っている。

いわき市ライブいわきミュウじあむ

「3.11いわきの東日本大震災展」入口

地震、台風、頻発する自然災害。防災拠点として「道の駅」への期待が高まっています。

自主電源、水源、防災トイレ、組立シェルター。大樹環境システムが道の駅の防災拠点化をお手伝いします。

風力発電機、WiFi 受発信器、災害用 LPガスバルク、組立式防災シェルター

ＥＶから交流 100Ｖを取り出せる、ニチコン Power Mover

災害時でも井戸水で清潔に使える、株式会社井戸屋のイドテック・トイレ

パートナー企業
株式会社井戸屋
オーキット株式会社
環境経営総合研究所
株式会社サイサン
ニチコン株式会社
ほか

大樹環境システム株式会社　〒104 - 0061 東京都中央区銀座 7-2-22 銀座同和ビル 3 階
TEL：03-6550-8560　FAX：03-6550-8561　E-MAIL：mail@taiju-es.jp

「災害時電源等派遣互助協会」始動！
（通称：Power Aid Japan）
災害時、被災自治体を全国の自治体が皆で助ける、わが国初の全国的相互扶助組織、Power Aid Japan が 2020 年 6 月 1 日に設立されました。
電気自動車が被災者を護る「命の電源」になります。

代表理事
篠田　昭
前新潟市長

事務局長
平井　竜一
前逗子市長

一般社団法人 災害時電源等派遣互助協会
〒104-0061 東京都中央区銀座 7-2-22 銀座同和ビル 3 階
TEL: 03-6550-8550　Mail: info@poweraidjapan.org
活動概要は HP をご覧ください。HP：www.poweraidjapan.org

災害乗り越え生きる英知

日本人は地震、津波、火山噴火、洪水、土砂崩れなどの自然災害が頻発する国土に暮らしている。最近の数年だけを見ても、2017年の九州北部豪雨、18年の西日本豪雨、北海道胆振東部地震、19年の九州北部豪雨、台風15号、19号など大規模な自然災害が発生、大きな被害が出た。わが国は繰り返し自然災害に見舞われ、大災害が集中する経験もしてきたが、それを乗り越えて命をつないできた。

繰り返される災害

有史以来の地震や噴火、津波などによる死者・行方不明者数の多い順に21を並べたのが**表1**である。関東大震災を筆頭に大変な数の死者が出ているが、最近の震災も多く、災害は決して過去のものではないことが分かる。風水害による死者・行方不明者も同様で、明治以降から戦後の災害も多く含まれている。

過去の災害集中期（貞観年間、鎌倉時代、慶長年間、元禄年間、安政年間、太平洋戦争敗戦前後）のうち、貞観年間（859～876年）と太平洋戦争敗戦前後（1944～50年）を整理したのが、**表2・表3**である。東日本大震災では、貞観地震の再来では今年2月、1977（昭和52）年の沖永良部台風以来42年ぶりに「令和元年房総半島台風（15号）」「令和元年東日本台風（19号）」と命名したことがその証しである。

図1で分かるように、年間に1000人以上の死者行方不明者が出た災害は、59（昭和34）年の伊勢湾台風の後から95（平成7）年の阪神淡路大震災まで生じていない。この36年間にわが国は「奇跡の経済成長」を果たした。

この時期が大災害の空白期であったことも、その成功に大きく寄与している。高度経済成長期と、大自然災害の空白期が重なっていたという指摘はほとんどないため、私たちは「大災害頻発国」に暮らしている意識が薄れてしまったのかも知れない。

過去に何度も災害集中期があったということは、今後も必ず災害集中期を迎えるということを予見させる。予測の難しい大災害に対して、いかに被害を少なくするように備えておくのかを、暮らしの基本に据えておく必要がある。

「災害の悲惨さ」を語り継ぐことは、慰霊にとどまらず同時に「それを乗り越えて生きる英知」を伝えることにつながる。それが伝承の大切さにほかならない。

※図表は「防災白書」などを基に編集部で作成

「悲惨」を語り継ぐ大切さ

3・11から3カ月たった6月末でも復旧が手つかずの惨状（宮城県気仙沼市で、2011年6月26日）

表1 日本の自然災害死者数（地震・津波・火山編）

順位	災害名	年	死者・行方不明者数
1	関東大震災	1923	105,000
2	明応地震	1498	41,000
3	鎌倉大地震	1293	23,000
4	明治三陸地震津波	1896	22,000
5	東日本大震災	2011	※ 21,565
6	宝永地震	1707	20,000
7	島原大変肥後迷惑	1792	15,000
8	八重山地震津波	1771	12,000
9	元禄地震	1703	10,000
10	善光寺地震	1847	8,174
11	安政江戸地震	1855	7,444
12	濃尾地震	1891	7,273
13	阪神淡路大震災	1995	6,473
14	福井地震	1948	3,769
15	会津大地震	1611	3,700
16	昭和三陸地震津波	1933	3,064
17	北丹後地震	1927	2,925
18	三河地震	1945	2,306
19	三陸沿岸及び北海道東岸地震	1611	2,000～5,000
20	安政東海地震	1854	2,000～3,000
21	安政南海地震	1854	数千

※2014年3月10日現在。震災関連死含む

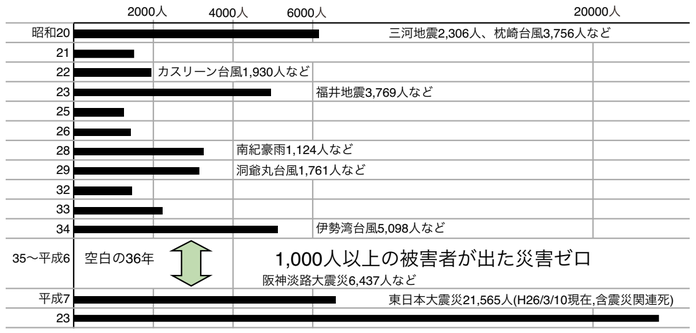
表2 災害史　貞観年間（859～876年）

	発災日（西暦）	被災地域	被災状況
地震	863年7月10日	越中・越後	山崩れ、谷埋まり、水湧き、圧死多数、直江津付近の小島数島壊滅
地震	868年8月3日	兵庫南部・京都	播磨諸郡の官舎、寺院のことごとく倒壊
地震	869年7月13日	三陸沿岸	三陸沖の巨大地震（貞観三陸地震）、城郭、門櫓など倒壊するもの無数、津波が多賀城下を襲う、溺死者1,000人
風水害	860年6月29日	京都	長雨による大水
風水害	860年10月7日	近畿諸国	京都に台風による洪水、諸国に高潮、死者多数
風水害	862年5月8日	京都	大雨による洪水、道路遮断
風水害	867年6月13日	河内	洪水、堤防決壊
風水害	871年9月28日	京都	大雨による洪水
風水害	872年8月12日	大和・因幡	台風による洪水、稲の被害
風水害	873年9月12日	伊勢	豊受神宮の層門倒壊、殿舎と倉庫が流失
風水害	874年10月12日京都大風雨	京都	暴風雨で御所大被害、大小の橋梁残さず流出、京の集落では激しい水の流入、溺死者多数、3,000軒以上が罹災

表3 災害史　太平洋戦争敗戦前後（1944～1950年）

	発災日（西暦）	被災地域	被災状況
地震	1944年12月7日東南海地震	東海道沖	死者・不明者1,223人、全壊家屋17,600戸、津波流出3,100戸
地震	1945年1月13日三河地震	愛知県南部	死者・不明者2,306人、全壊家屋7,200戸
地震	1946年12月21日南海地震	南海道沖	死者1,330人、全壊家屋11,600戸、津波流出1,450戸
地震	1948年6月28日福井地震	福井平野	死者3,769人、全壊家屋36,000戸、焼失3,900戸
風水害	1945年9月枕崎台風	九州～東北	死者・不明者3,756人、全・半壊家屋・流出88,000戸
風水害	1947年9月カスリーン台風	東海以北	死者・不明者1,930人、全・半壊家屋・流出9,300戸
風水害	1948年9月アイオン台風	四国～東北（特に岩手）	死者・不明者840人、全・半壊建物18,000戸
風水害	1949年8月ジュディス台風	九州、四国	死者・不明者160人、全・半壊家屋・流出2,560戸
風水害	1949年8～9月キティ台風	中部～北海道	死者・不明者160人、全・半壊家屋17,200戸
風水害	1950年9月ジェーン台風	四国以北（特に大阪）	死者・不明者503人、全・半壊家屋・流出56,100戸

図1 戦後の自然災害による死者・行方不明者数



日本国内の基本図である「地形図」発行元の国土地理院は、過去に起きた津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害の情報を伝える石碑やモニュメント（自然災害伝承碑）の情報を、ウェブ地図「地理院地図」に掲載する取り組みを始めた。東北が取り組む災害伝承を全国に浸透させるための一つの施策が、国土地理院の自然災害伝承碑プロジェクトである。同院は国土交通省に設置された測量行政を行う機関で、自然災害が多発する昨今、地理院地図を地域住民の防災意識の向上に役立ててほしいと呼びかけている。

1854年の安政南海地震と津波被害を刻んだ石碑は、160年以上も地元の人々に守られてきた。毎年の供養に合わせ、墨入れで文字をたどることで、災害の記憶と教訓が呼び起こされる（大阪市浪速区）

御嶽山噴火災害犠牲者慰霊碑（長野県王滝村）　2014(平成26)年9月27日、御嶽山が噴火。人知を超えた自然の容赦ない猛威により登山者らが巻き込まれ、58名の命が奪われ、5名の足取り途絶え生還叶わぬ、火山史上希にみる噴火災害となった

国土地理院 伝承碑プロジェクト進む

地域に残る教訓

国土地理院は取り組みの目的をホームページで以下のように述べる（要約）。

「我が国はその位置、地形、地質、気象などの自然的条件から、昔から数多くの自然災害に見舞われてきた。被害を受けるたび、私たちの先人はその様子や教訓を石碑やモニュメントに刻み、後世に遺した。一方で、2018年7月の西日本豪雨災害で多くの犠牲者を出した地区では、100年以上前に起きた水害を伝える石碑があったものの『石碑があるのは知っていたが関心を持って碑文を読んでいなかった。水害について深く考えた事は無かった』（平成30年8月17日付中国新聞）という住民の声が聞かれるなど、自然災害伝承碑に遺された過去からの貴重なメッセージが十分に生かされているとは言えない。国土地理院は、災害教訓の伝承に関する地図・測量分野からの貢献として、自然災害伝承碑の情報を地形図等に掲載することで、過去の自然災害の教訓を地域の方々に適切に伝え、教訓を踏まえた的確な防災行動による被害の軽減を目指す」

563基を掲載

国土地理院の取り組みは、新たに「自然災害伝承碑」の地図記号をつくり、地理院地図に掲載して自然災害伝承碑を周知し、地域住民に自然災害を現実のものと実感してもらうのが狙い。ウェブサイトを開くと全国の伝承碑を見ることができ、利用方法や活用事例も示されている。

地理院地図は6月12日に伝承碑情報を更新し、12市区町村37基を追加。公開数は47都道府県174市区町村の563基に増えた。

中には宮城県女川町で被災した小学校6年生だった子供たちが、震災直後に入学した中学校で先生と始めた取り組み「女川いのちの石碑」18基（3月1日現在）のうち、今年度に責任を持つ市区町村が、管内の自然災害伝承碑に関心が薄いのは問題。同院は「市区町村は率先して地元の伝承碑を掘り起こし、ウェブ地図への登録に取り組んでほしい。国土地理院の各地方測量部への登録申請をお願いしたい」と呼び掛けている。

日本人は地震、津波、火山噴火、洪水、土砂崩れなどの自然災害が頻発する脆弱な国土の上に暮らす。戦後の大災害を見ても、東日本大震災以降だけでも、近年は大規模自然災害が頻発していることが分かる。＝**表**

多数残る津波記念碑

東日本大震災から丸9年たったが、東北地方は過去に何度も大津波に襲われ、悲劇を忘れず後世に伝えたいとの願いを込めて各地に建てられた「津波記念碑」が多数残る。明治以降東日本大震災の前までで、甚大な被害が出た津波は明治三陸地震津波（明治29年6月）／昭和三陸地震津波（昭和8年3月）／チリ地震津波（昭和35年5月）だ。

国交省東北地方整備局は大震災後、主にこの3大津波に関して残る青森・岩手・宮城3県の「津波石碑」に関する調査を実施。317基を確認しており、同整備局のホームページで「津波・被害・津波石碑情報アーカイブ」として公開している。

碑文には「地震があったら油断するな」「地震があったら高い所に集まれ」「津波に追われたら高い所に上がれ」「ここより低い所に家を建てるな」など、実感こもる文言が刻まれている。

自然災害は地震や津波だけでなく、大雨による洪水や土砂崩れ、火山の噴火など多岐にわたる。1792年、雲仙普賢岳の噴火で前山（眉山）が崩壊。引き起こされた大津波が肥前・肥後の有明海沿岸を襲い、日本の火山災害史上最大の約1万5000人もの死者が出た。平成28年に熊本地震があったが、熊本県内にも数多くの「津波記念碑」が残る。後に『島原大変肥後迷惑』と語り継がれる大災害に起因するものが多い。

道路地図、住宅地図、都市計画図、鉄道やバス路線図、観光案内図、天気予報図、ハザードマップ、グーグルマップ……など、私たちは多くの地図に囲まれて暮らしており、地図は生活に欠かせない。

各地の自然災害伝承碑の登録を進めると同時に、登録された情報を、学校や地域での防災・減災への「備え」にどう生かすかが大切である。

先人が伝える教訓を正しく知ることが、災害を乗り越えて生きる「備え」を充実させ、被害を軽減させる。身近な災害履歴を学ぶ防災教育等での活用が、教訓を踏まえた的確な防災行動につながる。

近年の主な大規模自然災害

平成23年3月	東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）
平成23年8～9月	台風第12号（紀伊半島豪雨）
平成24年7月	九州北部豪雨
平成26年8月	豪雨（広島市の大規模土砂災害）
平成26年9月	御嶽山噴火
平成27年9月	関東・東北豪雨（鬼怒川の堤防決壊）
平成28年4月	熊本地震
平成29年7月	九州北部豪雨
平成30年7月	西日本豪雨
平成30年9月	北海道胆振東部地震
令和元年8月	九州北部豪雨
令和元年9月	台風15号（令和元年房総半島台風）
令和元年10月	台風19号（令和元年東日本台風）

地理院地図における「自然災害伝承碑」表示イメージ

新潟県中越地震　慰霊の碑（小千谷市）　平成16年(2004)10月23日夕刻に中越大地震が発生し、空前絶後の災禍となった。一瞬にして山容は激変し、農地・道路・水源・電気通信等あらゆる生活基盤が破壊される中、家屋全壊で児童3名の命が奪われた

Route Press ルートプレス 21st.

道 21 世 紀 新 聞

発行所：特定非営利活動法人 人と道研究会
東京都千代田区三番町 7-1　朝日三番町プラザ
Web　http://www.route-press21st.jp

Handing down the Lessons of the Great East Japan Earthquake

The View of the Hirota Bay from the Memorial Museum.
In the center, the Axis of Prayer runs straight towards the Bay
In the front, we can see the vast embankment.

The Great East Japan Earthquake registering the maximum magnitude of seven on the Japanese scale was centered in the coastal areas in the Tohoku region and its focal region was stretching 500 kilometers from north to south, throughout the prefectures of Aomori, Iwate, Miyagi, Fukushima.
Rikuzen-Takata is in the in southeastern area of Iwate prefecture.

In September 2019, the Takata-Matsubara(Takata Pine Fields) Memorial Park for the Tsunami Disaster national facility was partially opened in Rikuzen-Takata City, in the Iwate Prefecture. The purpose of this facility is to hand down to future generations the lessons of the Great East Japan Earthquake and Tsunami. Furthermore, "Michi-no-Eki"(Roadside Stations. Rest and Parking Spaces), "Takata-Matsubara" which was destroyed by Tsunami was rebuilt in the Park. The government was to sponsor a 3.11 memorial ceremony this year, but it was cancelled just before the event was to take place due to the spread of COVID-19. This scale of the memorial ceremony will probably be discontinued after next year's 10th anniversary. Therefore, the role and value of Great East Japan Earthquake and Tsunami Memorial Museum, which is the center-piece facility of the Park, will take on more importance.

Summer of 2019, a general corporation agreement was signed among the industry, academia, and government as well as civil societies. The agreement is called as, "General Incorporated Foundation 3.11 Densho Road Promotion Organization". "Densho" means to pass on . The organization's objective is to coordinate and promote the numerous activities among many disaster sites of the Great Earthquake and Tsunami sites providing people opportunities to understand and learn from the disaster in consolidated and effective ways. Such efforts contribute a great deal to help people remember the disaster and instills a desire to remember the lessons of the Great Earthquake and Tsunami.

The old Roadside Station, "Takata-Matsubara", which was totally destroyed by the Tsunami, has been rebuilt and now stands calmly in a corner of the Memorial Park along with the well-known Miracle Pine Tree as a permanent memorial to the victims of the Tsunami.

We Japanese have suffered from numerous natural disasters and must learn not only to live with them, but also to learn from them.

We are now suffering from the COVID-19 pandemic, which also is a product of nature. How we are going to cope with this new challenge? We look upon the importance of the lessons of the Great Earthquake with the renewed interest.

To never again experience the sadness: Memorial Park

The main building of the Memorial Park facing the Hirota Bay. There is the Memorial Museum on the left, and the revived Roadside station Michi-no-Eki"Takata-Matsubara" on the right.

The glove of approximately 70,000 pine trees had protected the city from Tsunamis in the past was completely wiped out by the 2011 Tsunami. The one tree that remained was called as the Miracle Pine Tree which stood 27.5 meter high with a 90 cm diameter trunk planted 170 year ago. It had withstood the Tsunami but was damaged by the sea salt water and was officially declared dead in May, 2012. As it had been a symbol of recovery in post-disaster period, the city decided to preserve it as monument for future generations, after special processing.

In 2012, the year after the Great Earthquake, the Advisory Committee conceived the idea of building memorial facilities in a memorial park to remember the victims of the disaster. It led to a Cabinet Decision agreeing to support the building of memorial sites in three prefectures which suffered the most from the Great Earthquake namely: Rikuzen-Takata City in Iwate prefecture, Ishinomaki City in Miyagi prefecture and Namie Town in Fukushima prefecture. The Takata-Matsubara Tsunami Memorial Park in Rikuzen-Takata City was the first to open.

The Takata-Matsubara Memorial Park consists of 130 hectares. Situated along the coastline of Hirota Bay, where the tsunami destroyed a pine grove, a 2-kilometer 12.5-meter-high tide-control embankment, has been built. The grand design was worked out primarily by renowned architect Hiro Naito, and Shiro Wakui, a landscape gardener and a special professor at the Tokyo Metropolitan University. He is also the Chairman of the Committee responsible for the park's concept. Both men have been overseeing the project based on their common understanding of the purpose of the project i.e., to create a memorial to symbolize the mourning for victims of the disaster and to the reconstruction efforts. It is necessary to reflect on the sea and nature, which leads to prayer. This is the most important underlying spirit of the Memorial Park.

Last Spring, 192 sites were registered as the first group to participate in the 3.11Densho Road project. One of the interesting activities is the introduction of a standardized pictograph of Disaster Memorial Facilities, which is easily understood and can be used as a guide map along with other informative brochures about the area.

The pictogram of the Earthquake Memorial Facilities

In the structure of the Park, there are two axes, one vertical and the other horizontal. The vertical axis, which projects from the Memorial Museum standing parallel with the seashore line in the middle of beautiful Hirota Bay and crossing the embankments at a right angle. It is called as the Axis of Prayer. The horizontal axis extends from the Tapic 45 (the old road station, "Takata-Matsubara" and is the site of the disaster) to the Memorial Museum and further on to the new roadside station. It is called as the Axis of Reconstruction.

Currently, the "Sea Viewing Place", and the "Wreath laying Place" are open to the public. Two are situated along the line of the Axis of Prayer. The plan is to complete the entire Park facilities in 2020. "Japanese have experienced three severe disasters: a major Earthquake, a Tsunami and the Fukushima nuclear power plant accident. To protect lives, the lessons learned from these disasters must be handed down to present and future generations". Pope Francis spoke of this need to the victims of the Great Earthquake, whom he met in Tokyo, after he had visited Hiroshima and Nagasaki in November 2019. The purpose of his visit was to pray for all people.

Japan is blessed with the four distinct and beautiful seasons. On the other hand, it suffers almost periodically from sever natural disasters. More than 20% of the world's earthquakes having a magnitude 6 and above occur in the area surrounding the Japanese Archipelago. Japan is also located where typhoons quite often cause death and destruction from violent storms and floods.

Since the Great Earthquake and Tsunami of 2011 and its aftermath, in which we experienced shortages of essential supplies, materials and electricity, we have had opportunities to ponder the meaning of life and pursue it with renewed enthusiasm.

We are now suffering in a global pandemic. What lessons can we learn from COVID-19? Infectious diseases such as smallpox and Ebola have inflicted much misery, death and despair on people around the world since mankind appeared on earth. We know it is not possible to conquer nature, but we also know that we can coexist with it. We Japanese have learned, through our experiences of natural disasters, how to coexist with nature harmoniously. In the era of pandemic, we must again apply what we have learned from present and past lessons, and think about our future.

Place for pray to protect lives and to learn lessons :Memorial Museum

The Memorial Park's core facility is the Great East Japan Earthquake and Tsunami Memorial Museum also known as the Iwate Tsunami Memorial Museum. Facing the sea on the right side is the revived roadsaid station, Takata-Matsubara. Adjoining the roadsaid station on the left, is the Memorial Museum. The BRT station is found on the site.

To prepare for a disaster, it is important to share a common approach to disaster preparedness, based on the lessons of past disasters, with all stakeholders such as different levels of government, local businesses, and individuals. The underlining concept of the Memorial Museum is that even with the large scale disaster, we can protect lives through properly using technology and proper actions. The aim of the Museum is not only to remember the victims of the earthquake and tsunami, but also to teach the lessons learned through individual testimonies and the destruction left behind by the disaster.

The Museum's mission is to contribute building a resilient society able to cope effectively with natural disasters, by learning from our ancestors' experiences, and by sharing the lessons and the teachings learned from the experiences of the Great East Japan earthquake and tsunami with the world.

The theme of the exhibition is entitled, "Protecting lives, and living in harmony with the nature - to never again experience the sadness such as that of the Great East Japan Earthquake and Tsunami".

Entrance of the Museum:Multilingual staff welcome you at the entrance of the Memorial Museum

Guidance Theatre:Explain the meaning of the Museum via audio visual media

Zone 2:The actual objects that were damaged by the Earthquake and Tsunami and the photos of the damaged sites are being exhibited

Zone3:The Headquarters of the Earthquake and Tsunami Operations of MLIT, is revived. The former Commanding Officer of the Operation Room, sent the message at the opening of the Museum

The Memorial Museum is 75 m long and 30m wide occupies about 1,000 square meters. It is organized into the following four zones:

ZONE 1: Tracing the history: Historical and scientific perspectives are presented describing the events of the disaster.
ZONE 2: Learning the facts: We will look at the facts of the Great East Japan Earthquake and Tsunami through actual objects that were damaged, photos of damaged sites, and the voices of the victims.
ZONE 3: Learning the lessons: We will share lessons about how to protect lives by highlighting people who escaped, helped others, and provided support.
ZONE 4: Moving towards restoration together: Expressing gratitude for the support from the rest of Japan and the world along with showing the restoration of damaged areas and examples of the regions ability to overcome the tragic events of the disaster and steps taken to move forward.

Recently, there have been natural disasters worldwide quite often causing fatalities and severe destruction. Transforming our society to a disaster prevention conscious society is now needed before we experience the next disaster. The Memorial Museum, and such sites as the "Miracle Pine Tree" and the old roadside station, Takata-Matsubara, provide we Japanese with timely opportunities to reflect on how to better prepare ourselves in Japan, a country that is prone to experiencing large scale disasters.

Michi-no-Eki "Takata-Matsubara" revived. The old Michi-no-Eki destroyed by Tsunami becomes the Memorial of the Tsunami Disaster.

The roadside station "Takata-Matsubara", completely destroyed by the Tsunami, was reopened in September, 2019, after eight and a half years of the Great East Japan Earthquake and Tsunami. This roadside station was revived, on the new location, as an unified facility together with the Iwate Tsunami Memorial Museum, in the Takata-Matsubara Memorial Park for Tsunami Disaster.

The former roadside station "Takata-Matsubara(pine field)", which was destroyed by Tsunami

As of May 2020, there are 1,173 roadsaid stations in Japan and the Takata-Matsubara roadside station has been designated as one of the 'Important Roadside Stations' Category, in the first batch in 2014, only three years after the Great Disaster, by the Ministry of Land, Infrastructure and Transport. It means that there was a high expectation for its contribution towards the regional development.

The new roadside station has a direct shop in which they sell agricultural and fishery products, and the local specialty, with the cooperation of local organizations such as the fishermen's cooperative. There are also a restaurant, a café, and the space for babies with baby beds and chairs, in addition to the standard facilities of roadside stations such as clean toilets, parking places and an information center.

Direct shop of the Agricultural & Marine products: Oysters are very famous

"Pine Fields Restaurant", managed by the Fishermen's cooperative

The facilities are well received and more than 100,000 people had visited the Station after only a month since the opening, which means more than 3,000 people per day. The roadside station is expected to contribute to activate the disaster-stricken areas on the coasts and it serves well for such purposes.

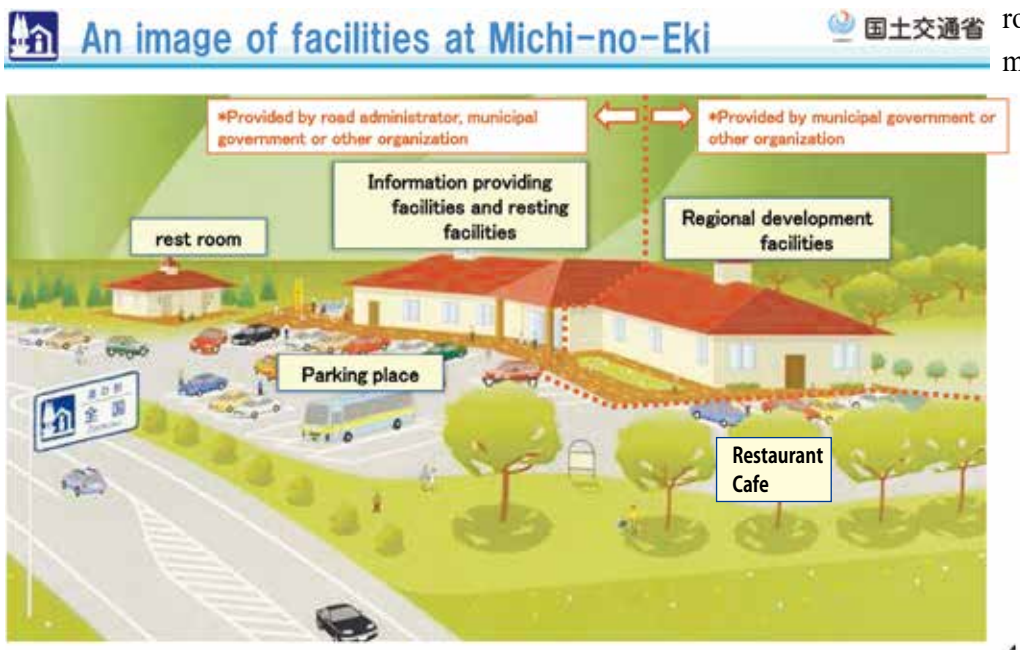
Another important objective of this roadside station is to function as the new base for the disaster prevention education by disseminating the information of the actual situations of the disaster and the lessons learned, at home and abroad.

The road station is revived successfully as an attractive gateway for the Sanriku Coastal Area. The Sanriku means 600 km long coastal area starting from the Hachinohe City, South-East of Aomori prefecture through the Ojika Peninsula, Mid-East of Miyagi prefecture. It has typical sawtooth coast lines, and there are many good harbors, such as Miyako, Kamaishi, Ohfunato and Kesennuma harbor. In the offshore of the Sanriku where the Black Japan Current and the Oyashio, the Kurile Current meet, and is considered one of the three great fishing ground in the world. The area is also recognized as a geo-park, and it is one of the most famous picturesque places in the North-East Japan.

The old roadside station, once a stylish building, is now restored and placed next to the famous Miracle Pinetree, remains as one of the core Memorial Site of the Great Disaster.

Café on the opening day

What is a Michi-No-Eki ? ~a roadside station ~



More than a quarter of a century ago, a system of roads had developed all over Japan. People had felt the need for safe and comfortable facilities on the less traveled roads. Such facilities on the highways were already available. In 1993, after careful preparatory work called the Social Experiences, the Ministry of Land, Infrastructure and Transportation(MLIT), for the purpose of providing the necessary services to drivers as well as activating local communities began the Roadside Stations(*Michi-no-Ek*i) program.

In 1993, 103 stations were established in the first group . They were well received by motorists, visitors and local communities. The number of *Michi-no-Eki* had been increasing steadily and as of May, 2020, numbered1,173. As there are 47 prefectures (including Tokyo, Osaka, Kyoto, and Hokkaido) in Japan, numerically speaking, there are on average 25 *Michi-no-Eki* in each prefecture, mostly in the rural areas. (The numbers of *Michi-no-Eki* in each prefecture varies, e.g.54 in Gifu prefecture and one in Tokyo). This means that the program has had a significant impact on development in the regions, especially in the rural areas, where they have been suffering seriously from depopulation and aging, and a revival of communities was very much needed.

The Ministry of Land, Infrastructure and Transportation is the largest Ministry in Japan and the program of *Michi-no-Eki* is considered to be one of the most successful programs of the Ministry. For the success of the program, other powerful ministry programs, such as the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, and the Ministry of Economy, Trade and Industry have made significant contributions.

Most importantly, the role of municipal governments has been the key to the success of the program. Also, success of the program depended on the local communities' interests, commitment, and enthusiasm. This is truly a grass roots program.

The concept of *Michi-no-Ek*i is a "uniquely lively place created by local communities". The aim is to aid in revitalizing local communities, by utilizing the local culture, history, famous places, and local specialties, through a variety of services featuring regional uniqueness.

The objective of Michi-no-Eki is defined as follows:

Rest function: To provide a safe and comfortable roadway environment for road users. Free parking as well 24-hour access to clean toilet facilities must be secured.

Information dissemination function: To provide various information on road situations, local tourism, emergency medical services and so on.

Regional development and cooperation function: To function as core facilities to promote regional development through working together within a roadside station system of towns and villages promoting cultural, recreational and tourism activities.

Disaster Prevention and Michi-no-Eki

During the time of the Chuetsu Earthquake (in the Niigata prefecture,) in October 2004, several *Michi-no-Eki* played important roles in supporting local communities. Therefore, people started to pay attention on the roles of *Michi-no-Eki* during a disaster. They assumed the following roles:

*To provide the facilities of *Michi-no-Eki* as shelters
*To act as supply stations for relief goods
* To disseminate disaster information
*To provide bathing service to people who could not bathe due to the suspension of the water supply.
* To provide victims with temporary housing on the premises.

Especially during the time of the Great East Japan Earthquake in March 2011, it became very clear that *Michi-no-Eki* could function as bases for refuge and local disaster recovery.

Based on the experiences of past disasters, several groups of *Michi-no-Eki* have constructed a "Mutual Support Agreement", with local governments. The first case was between a group of ten *Michi-no-Eki* in the southern region of Gifu Prefecture and corresponding municipal governments. The Gunma prefectural government signed an agreement with all the roadside stations in the prefecture. In September, 2019, seven *Michi-no-Eki* in the Yamagata prefecture, North-Eastern Region, signed an agreement of cooperation in the case of disasters with the Yamagata River and National Road Office, MLIT.

Each roadside station is geared to its local culture, offering a variety of activities and products. Men and women of all ages actively participate in the program.

Recently, *Michi-no-Eki* have been considered as the nuclear bases of small community development in rural areas, which the Ministry of Internal Affairs and Communications has been trying to promote as a crucial element of the rural development program.

More than a quarter century since the program began, *Michi-no-Eki* have been functioning as the core of community development. Most significantly, the *Michi-no-Eki* program has been useful in narrowing the gap between urban and rural areas. Proceeds earned remain in the area and contribute to supporting and revitalizing rural communities.

Many people in Asia, Africa and Central America are interested in the roadside station program. They include Thailand, China, Guatemala, Mozambique, Vietnam and Indonesia. In order to introduce such program in other countries, a very important factor is getting local people involved and enthusiastically committed. In addition, support from national as well as local governments is critically important.

(The English version is prepared by Kazuko Kano)